

言語聴覚学科について

新潟医療福祉大学医療技術学部

医療技術学部長（言語聴覚学科学科長兼任）湧井 豊

キーワード： 言語聴覚の歴史 言語聴覚士養成過程 大学教育 知識と技術
学科カリキュラム

Introduction to the Department of Speech Therapy at Niigata University of Health and Welfare

Yutaka Wakui, Ph. D

Key words : History of Speech Therapy. Education for Speech Therapists. University Education,
Technology and Specialization. Departmental Curriculum.

*English version is available in Niigata Journal of Health and Welfare Vol. 1, No. 1 2001

1. はじめに

言語聴覚学科は、平成9年12月に成立した「言語聴覚士法」にもとづき、新潟医療福祉大学の言語聴覚士養成課程として平成13年4月に設置された。全国的にみると言語聴覚士の養成課程をもつ4年制大学は、平成7年に設置された国際医療福祉大学（定員80名）を初めとして、広島県立保健福祉大学（定員30名）、川崎医療福祉大学（定員30名）、北里大学（定員20名）、九州保健福祉大学（定員40名）、について6番目の設置となる。来年度には北海道医療大学（定員50名）、帝京平成大学（定員80名）の設置が予定されているという。また、大学と同等の国家試験受験資格の与えられる指定養成機関は、高卒3年課程、高卒4年課程、大卒2年課程など修業年限の異なる30を越える専門学校があり、これらの卒業生の総数はここ数年のうちに年間1000名に達する状況である。

本学の言語聴覚学科に今年入学した学生

は50名であり、1期生として4年後の国家資格取得を目指して元気に勉学に励んでいる。現在の学科の教員は教授4、助教授3、講師2、助手1の合計10名である。

2. 言語臨床の歩みと国家資格制度の成立

言語聴覚障害の臨床は、約40年前アメリカ言語病理学の考え方や治療法が紹介されたことにより急速に我が国に広がり、教育と医療の二つの分野を中心として目覚ましい発展を遂げてきた。教育の分野では、昭和33年に言語障害特殊学級として1学級が仙台市に正式に設置されて以来、その重要性和需要度の高さから、全国各地に学級が設置されてきた。平成8年度の言語障害特殊学級数は全国で2,639であり、通級して指導を受けている児童・生徒数は16,592名である（文部省特殊教育資料）。しかしながらこの学級は設置された当初から、指導内容の特異性に伴い通級という制度をとらざるを得

なかった。児童は、一日の大半を学籍のない通常の学級で教育を受け、障害の程度により週に2～3時間だけ学籍のある言語学級に通い、ことばの治療指導を受けるという異常な状態が続いた。文部省は平成5年度に学校教育法施行規則の一部を改正し、通級学級制度を法制化したことにより長年の異常な学級形態は解消された。またこの法改正により、新しく注目されている学習障害児やその他の軽度障害児教育への早期対応が可能となったことは、特筆すべきことと言えよう。またこのような教育形態が実施されたことにより、教員免許を持たない言語聴覚士の教育現場での臨床活動が行われ始めている。

一方、医療分野における成人を対象とする失語症の臨床は、昭和39年に長野県鹿教湯温泉療養所において初めて実施された。昭和47年には、東京都老人総合研究所に言語聴覚研究室が開設され、失語症を中心とした高齢者の言語・コミュニケーション能力に関する様々な研究が行われ、失語症の臨床に大きな貢献を果たしている。しかし、失語症患者に対する言語治療士の数はあまりにも少なく、また身分も定められたものがなく、病院として人員要求もできない、保険点数も導入出来ないなどの問題が山積していた。したがって言語治療士の資格や養成などの身分制度についての検討が急務となり、昭和55年、日本耳鼻咽喉科学会、日本音声言語医学会、日本聴能言語士協会などによるST身分制度合同委員会が発足する。この検討委員会はこの後長い年月をかけて討議を重ねた結果、関係者の大変な努力が実って、ようやく平成9年12月第141国会において「言語聴覚士法」として成立した。この法案によって初めて言語聴覚士の名称が正式に用いられることになり、その業務内容や国家試験受験資格（養成制度）などが決定した。

この法案が施行された平成11年の3月に第1回の言語聴覚士国家試験が実施され、4500名を越える受験者に対して、合格者4003名、合格率は87.9%で言語聴覚士1期生が誕生した。翌年の受験者は1565名で合格者664名、合格率42.4%、今年行われた第3回の試験では、受験者1908名、合格者936名、合格率49.1%であった。

3. 学科の教育内容と特色

人間にとって「ことば」は重要なコミュニケーションの手段であり、そのコミュニケーション能力が障害されるということは、人間のもつ問題の中でも最も過酷なものの一つと考えられ、その生活も一変してしまうことになりかねない。このような「ことば」の障害は、原因や病態の異なる様々な種類があり決して一様ではない。言語障害をもつ人々の苦しみを理解し、その障害を可能な限り軽減し、その人の生活の質を高めるための適切な支援をすることが言語聴覚士の仕事である。そのためには言語や聴覚の障害を的確に評価し診断することによって、治療プログラムを作成し実施することが出来なければならない。本学科のカリキュラムは、1・2年次の基礎科目群で解剖学、生理学、病理学などの専門基礎を学び、2・3年次では専門専攻科目群として言語障害概論から各障害別の評価、診断、治療法を学び、3・4年次の臨床実習へと系統的に配置され、確実な知識、技術の修得を目指している。また、職業人としての豊かな人間性や倫理観、チーム医療の一翼を担う自覚と協調性、さらに国際社会においても活躍できる語学力の育成にも重点をおいている。

4. おわりに

我が国が初めて経験する超高齢化社会、その高齢化社会を支える医療・福祉の専門職養成が急務であることに異論はないが、

ただ数を増やすことでなく年々進歩する医療の高度化、専門分化に対応できる質の高い人材の育成が重要である。本学の言語聴覚学科は、指定養成校の急激な増加、50%を割る国家試験の合格率、不安定な卒後の進路など大変厳しい環境の中で誕生した。日本海側における唯一の4年制大学養成課程として、高齢化社会に貢献できる質の高い優秀な人材をいかに育成するかという重大な使命をもっている。学科を取り巻く環境がどのように厳しくとも、その使命を果たすために我々は最善の努力を惜しんではならないと考えている。